

今期2月2日出版 春燈/第75卷第2号(每月10日出版) 昭和21年7月22日第3刷刷版物誌認可

# 春燈

2月号

2020 February



主宰の句

安立公彦

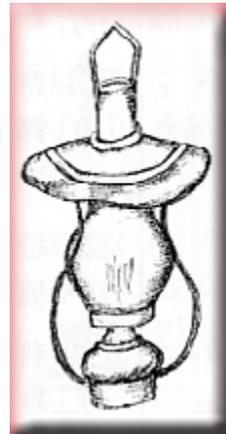
落葉踏みゆくや明日への一步とし

荷風旧居笹鳴影を散らし去る

侘助の一花や深き空の紺

寄り咲くは亡き父ははや帰り花

年惜しむひと日筑波嶺見て飽かず



# 久保田万太郎の句

雲一つなくてまばゆき雪解かな

『これやこの』昭和十九年  
「寂しさ」と前書がある。前書が無ければ、澄みきつた青空が大きく広がり、まばゆいばかりの日差しの中に雪解けの始まる明るい景が見えてくる。

しかし、その明るさ、真つ青な空が、その時の心の状況により却って寂しさを増幅させているのではないだろうか。この前書によって句の意味合いは、全く違うものになってしまうのだ。内にある深き寂しさである。

西岡啓子

# 久保田万太郎の句

ばか、はしら、かき、はまぐりや春の雪

『流寓抄』昭和三十三年

何とも不思議な句である。万太郎は貝が好きだったの  
だろうか。上五、中七に貝の名を並べて折からの春の雪  
しかし、この句を声に出して読むと、その調べの美しさ  
が解り五感で貝を味わっているような気分になる。

暮雨、傘雨と号した万太郎には雨や雪を配した句が多  
い。自ずと陰翳が生じ、その色感は淡くなっていく。

まるで日本画を見ているようだ。

木村梨花

# 燈下集



○ 木村傘休

秋澄むや波のはたてに比良比叡

御詠歌の頭とる鳶の小春かな

冬ぬくし緑に暮るる竹生鳥

水鳥の影紫に余呉の湖

一目散に伊吹暮れけり神の留守

○ 加藤良子

加齢とは神の恵や初手水

凧や断捨離と言ふ大仕事

動かざる池の魚や冬ごもり

励ましの友の言葉や石路の花

冬桜見に行く話遠くなり

○ 鈴木静恵

納経や茶の花垣の札所寺(秩父)

垣越しに話の弾む小春かな

北吹くや秩父囃子の稽古笛

着ぶくれて山風を聴く音楽寺

武甲山発破の余韻に眠りけり

○ 松本峰春

银杏黄葉落葉とよりも降るやうに

家紋入りの一歳のぬて七五三

初霜や一樹の影の残る庭

冬の回廊軒の深うてランプの灯

ふんぎりをつけて曲がれば冬薔薇

○ 鈴木直充

子のあくび母のあくびや神の留守

コンセントみんな塞がり冬隣

茶が咲いて土蔵の壁の剥落す

綿虫よ日暮は淋しくはないか

百寿翁八手を咲かせ逝きにけり

○ 高橋和女

秋の訃やはかり難きは神の意図

友の訃や秋の静かな夕まぐれ

死はいつも忽然とあり秋夕焼

思慮ぶかき友の眸や菊の露

いつの日か又逢ふ日まで流れ星

○ 柴崎甲武信

歩かねば歩けなくなる小春空

熱爛の手酌がすすむ屋台かな

忘却の彼方が肴おでん酒

処により小雨とはこれ初時雨

凧の吹く夜は想ひ重ねけり

○ 近藤牧男

その男みかんの皮を灰皿に

行くあてのなき手袋をしてをりぬ

冬帽子鴉の視野を過りけり

枯れてゆくもののひとつに齡かな

明日への途中の咳をこぼしけり

○ 吉澤恵美子

おそろひの赤きドレスや赤とんぼ

針に糸やうやく通す夜なべかな

北国は雪の洗礼受けてをり

立冬の戻り鰹の旨きかな

介護する人へ勤労感謝の日

○ 卜部黎子

我が影のわれを急ぎ立つ神無月

乾鮭の海鳴り遠く吊るさるる

綿虫の夕日を散らす先師の忌

石庭の石の陰影帰り花

生まれ変はる来世を信ず三島の忌

○ 卯木堯子

佐助や変はらぬものに愛読書

ネクタイのワインザー・ノット冬の服

行き摩りの町のデジャ・ビユ冬の鳥

鮮やかな黄色冬蝶良き小振り

静かなる鳩の逢引冬の駅

○ 深川敏子

芋掘りや風に転がる子らの声

山越せば別の空ある柿日和

影といふ年齢不祥神の旅

二階までまた探し物枇杷の花

冬うらら犬はリードを外されて

○ 大室恵美子

山上の祠に日矢や神還る

時雨忌や溪の向かうに列車の灯

団欒の日々よみがへる零余子飯

父の座の確と定まり炉を開く

スポーツジム賑はふ勤労感謝の日

○ 尾野奈津子

偕老の約は果たせず山眠る

はんなりと大和三山冬がすみ

瞑想の鴨ひて群れに近寄らず

渺々の海の白波風疼く

散り急ぐ紅葉踏みしめ馬籠坂

○ 小嶋恵美

総出して整ふ山河白鳥来

半眼の浮世の果てへ暖房車

石と石肩寄せ合うて寒に入る

鍋焼や声うつくしき人のゐて

命惜しめと寒月光のメールかな

○ 三宅文子

半分は貴方が悪い冬瓜汁

小春日や練りてたたきて陶土佳し

紋付の似合ふ子となり七五三

千歳飴袋に揺るる鶴と亀

朝出でて夜帰る家花八手

# 余言

安立公彦

俳人の熱き掌に酔ふ男郎花

片桐てい女

「男郎花」はオミナエシ科の多年草。双方ともに秋の野徑に風情を添える。花は女郎花は黄色、男郎花は白色。この句、この「俳人」は女流俳人。路傍に咲く男郎花の白い花に、つと触れた女流の掌。その「掌」を「熱き掌」と感じ取る「男郎花」。ともに作者の感覚描写であり、そのまま「男郎花」を擬人化した作品である。「熱き掌に酔ふ」は、さながら多感な女流俳人を活写しているようだ。高齢にして益ます活力のあるてい女さんである。

朴落葉むかし恋文書きしかな

三上 程子

この句は十一月本部句会の特選句の一つ。「朴」はモクレン科の落葉高木。葉もかなり大きい。樹皮は漢方生薬に利用されている。「朴落葉」は一句の対象に相応しい。

程子さんは、今、その朴の高木のある林道を歩きながら思索に耽っている。或いは句作かも知れない。ふと踏んだ朴落葉の乾いた音色に、我に返るのだ。瞬時、その思索を越

えて、「むかし恋文書きしかな」の思いが甦つて来る。この句、頷く人も多い郷愁を呼ぶ句と言えよう。

カーテンにあそぶ日の斑や小六月 栗原 完爾

十一月本部句会の特々選句。「小六月」は陰曆十月の異称。春のように暖かい日和が続くので、「小春日」とも称する。「小春」と言う言葉はひびきも善い。

この句、「カーテンにあそぶ日の斑」が善く出来ている。「カーテン」により、木立のある庭に面した窓、という背景が活写されてくる。「あそぶ」には、そのカーテンの揺らぐ様子が感じられ、一読、対象を身近に感じる、写生の善く効いた句と言えよう。

空也忌や然れど念仏絶やすまじ 本多 遊方

「空也忌」は陰曆十一月十三日。空也上人は平安中期の僧で空也念仏の祖。諸国を遍歴して道路や灌漑など社会事業を行うと共に、京都を中心に貴賤を問わず口称念仏の布教を展開し、市聖いちみょうと称されたと言書は記す。

作者は僧籍に在る。「念仏絶やすまじ」に、市井の人とは異なる念仏への姿勢が、強く深く感じられる。

ヘルメット取る夜学子の若からず 小泉 三枝

「ヘルメット」は、危険を避けるために被る帽子。そのヘルメットを「取る夜学子の若からず」に、夜学子の姿が自ずと浮かんで来る。昼間はヘルメットを被るような仕事をしている「夜学子」だが、夜は、夜学生の一人として、学問に勤しんでいる毅然とした姿が感じられる。一句の風姿が善い。作者の夜学子に寄せた暖かい思いが善い。

キッチンの妻の讃美歌冬ぬくし 吉川 隆

キッチンで食後の洗い物をしている「妻」、その「妻」が「讃美歌」を歌っている。讃美歌は、キリスト教で神を讃美する歌。しかし讃美歌の中には、信徒でない人に馴染のある歌もある。この「妻」もそういうひとりではなかつたか。この句、「キッチンの妻の讃美歌」が善い。「冬ぬくし」に、その「妻」への思いが良く出ている。

さびしらの夕星ひとつ石路明り 後藤眞由美

「さびしら」は淋しい様子。夕空を仰ぐ作者。冬は短日の言葉の通り日暮が早い。心淋しい思いに仰ぐ空には、夕星ひとつが光っているのみ。「さびしらの夕星ひとつ」に、その思いが善く出ている。視線は自ずと庭前に咲く石路の

花に向く。そこには石路の黄色の花が咲いている。この季節の石路の花は、伸びた茎とともに、見るひとに安らぎを与える。「石路明り」がみごとだ。

櫓田となりし齋田日を寛に 永井 恵 子

「霧島神宮」の前書がある。作者の住まいは都城市。宮崎県西部の市、城下町である。霧島神宮も近い。この神宮の祭神は瓊瓊杵尊（にぎのきみこと）。由緒ある社である。この「齋田」は神に供える米を栽培する田。御供（みこ）田とも謂う。

その「齋田」は、今一面の「櫓田」となっている。稲を刈り取った後に萌え出る青い芽。「日を寛に」が善い。如何にも南国らしい趣の感じられる句だ。

母の忌や庭にひとつの帰り花 持田 信子

今日は亡き母の命日。仏壇の供花を替え、蠟燭を点して母に念仏を唱える作者。ふと庭を見ると、こんもりと盛り上がった躑躅の茂みの中に、「ひとつの帰り花」が咲いている。このつつじは母の好きな花だった。

小春日和の落ちついた庭の佇まいが浮かんで来る。作者は季節の野菜を自作していると聞く。もとより限られた野菜であろうが、なかなか出来ることではない。「や切れ名詞止め」の、一句の趣旨に適う風情のある句である。

# 当月集

安立 公彦選



○ 田中嘉信

色鳥のこ糸の降りくる木椅子かな

萩むらの緩やかな揺れ夕日影

コスモスの撮られ上手に揺れにけり

むら薄揺れて夕日を弾きけり

色変へぬ松や寿ぐ二重橋

○ 佐保まさを

散り初むる銀木犀や蔵の町

青空をゆらり離るるひと葉かな

浜風や杭の水鳥動かざる

久々の友の来訪葱鮎鍋

西行堂へとどく朝の日実千両

○ 佐藤まさ子

チャイムの音半音さげて冬に入る

窓際に香りとどむる冬薔薇

小春日や市民農園鴨の小屋

寒梅の道走り抜く陸上部

盛る籠の三個求めて柚子湯かな

○ 佐藤玲子

バイキング里の新米お代りす

自家用と云ふ稲架掛けの物届く

日短手に持つ物を探しをり

煮て漬けて大根一本一人の餉

十人の二人欠けたる年忌

○ 中澤弘

どの店も手打の儀式酉の市

行く人の衿を高むる酉の市

山茶花の重くうつむく雨の朝

池の面に映る大様枇杷の花

枝打ちし木立の淋し木守栴

# 春燈の句

安立 公彦選



冬薔薇かすかに匂ふ書庫の窓

福井 西本 花音

焼きたてのパン屋の列や冬ぬくし

影持たぬ駅の日時計冬ざるる

マフラーを結び直して郷里発つ

有り難うとも言はで降り行くマスクかな

神奈川 高橋 寛子

神域の渡り廊下や冬の虹

教皇の核なき世へと冬の弥撒

冬林檎まるかじりして子に従ふ

時代絵巻いざ出陣や令和秋(城まつりパレード)

滋賀 馬場 節子

登城坂一步一步に天高し

路地よりの木犀の香や城下町

天守背に琵琶湖や大き冬の虹

駅力フエの窓に顔寄せ初しぐれ

神奈川 辻 泰子

喜寿の夫いまだにセーター赤が好き

自家製の切干少し太かりき

ピッコロの高音冬の木立縫ふ

子も孫も無事と聞く日のメロンの香

広島のメロン京に住む子に届けたし

しみじみと娘の年数ふるメロンかな

メロン欲し娘に買ひし土産なれど

嫉くちやの日の丸のぼす文化の日

まとひつく羽音かそけき冬蠅

名峰を丸ごと洗ふ時雨かな

良寛の眼あるべし冬の星

竜田姫の遅参自慢や奥上総

ぶらぶらり己つらぬく一茶の忌

道ならぬ恋や枯野の奥の果て

長火鉢老嬢たばこ吸うてけり

広島 川崎 雅子

京都 西村 洋平

千葉 木村秋草子